【資料紹介】

島田市立湯日小学校保管の考古資料について

主任学芸員　篠ケ谷路人

1. はじめに

平成 26 年 6 月、出前授業のため島田市立湯日小学校を訪ねたところ、担当の中田教諭より小学校に寄贈を受けた土器や石器類があるので見てほしいと要望を受けた。縄文時代の石器や、古墳から出土した須恵器類など約 70 点が収蔵されていた。 一部の遺物には、発見された地名などが墨で書かれたものもあり、未確認の遺跡名などもみられた。これらの資料は、地元湯日地区の遺跡を知る上で重要なものであり、実測及び写真撮影など記録保存する必要性があると判断した。中田教諭を通じて、松本校長・高橋教頭よりご理解・ご協力をいただき、ここに資料を公表させていただくものである。

2. 所蔵資料の内訳と整理方法

所蔵資料は、縄文時代の土器や石器・古墳時代の須恵器・奈良時代の瓦・鎌倉時代の陶器・江戸時代の陶器に大別される。一度洗浄し、乾いたところで改めて見直し、石器として用途がわかるもの、実測のできる残存状態の良い陶器など 64 点を選定し図化した。これらの遺物は「湯日小1」と小学校名と通し番号を 1 から 64 番まで注記し、実測及び写真撮影を行った。内訳は縄文時代石鏃5点(湯日小1～5)・石錘7点(湯日小6～12)・摩製石斧2点(湯日小 13・14)・石剣1点(湯日小 15)・打製石斧 14 点(湯日小 16～27)・礫器(湯日小 28・29)・縄文土器(湯日小 30～33)・江戸時代志戸呂焼碗(湯日小 34)・古墳時代須恵器坏身(湯日小 35～41)・須恵器坏蓋(湯日小 42・43)・須恵器坏身(湯日小 44・45)・須恵器高坏(湯日小 46・47)・須恵器ハソウ(湯日小 48・49)・須恵器平瓶(湯日小 50～55)・須恵器長頸壺(湯日小 56)・須恵器壺(湯日小 57)・布目瓦(湯日小 58～60)・山茶碗小碗(湯日小 61・62)・志戸呂焼花瓶(湯日小 63)・環状石(湯日小 64)である。以下保管資料の状況について検証する。

3. 保管遺物について

○縄文時代の石器(遺物観察表1)

(1)～(5)は縄文時代の石鏃で、(5)は有茎鏃、(1)～(4)は無茎鏃である。無茎鏃のなかでも(1)は基部が平坦で平基無茎鏃、(2)～(3)は抉りがあり凹基無茎鏃である。石材は、(4)が岐阜産の下呂石、他は地元大井川で採取される頁岩である。

(6)～(12)は硬質砂岩製の石錘である。平らな河原石を採取し、長軸を上下打欠したもので、大きさから小型の(6)～(8)、大形の(9)～(12)がみられる。

(13)・(14)は緑色泥岩製の磨製石斧である。(13)は円柱形の「乳棒状石斧」で全体的に良く研磨され成形されている。(13)は台形状で扁平なタイプで、両端を丁重に研磨している。中央は装着のためか長方形状に打ち書いている。

(15)は緑色泥岩製の石剣である。全体的に打痕があり、上部を欠損していることから、制作途中の未製品であろう。

(16)～(27)は打製石斧である。(16)～(22)は短冊形で(18)がホルンフェルス、その他は硬質砂岩製である。(23)は分銅形、(24)～(27)は欠損した刃部や基部破片である。全体的に小型のものが多い。

(28)・(29)は砂岩製の礫器である。(28)は円形状に大まかな剥離をして刃部を作り出している。(29)は短い縦長状の剥片で、左縁辺に刃部をつけている。

○縄文時代の土器・江戸時代の志戸呂焼(第4図遺物観察表2)

(30)～(33)は縄文土器である。(30)は波状口縁で、口縁に沿って平行沈線を引く。波状の高くなった部分を文様の区切りとし、再び平行沈線を引き文様帯を形成する。後期の掘之内式土器である。(31)～(33)は表面に条痕文を施す晩期の粗製土器である。(34)は志戸呂焼の胴下半から底部にかけての破片で、施釉せず貼付高台の小碗で江戸時代のものであろう。

○古墳時代の須恵器(第4～6図・遺物観察表2)

(35)～(41)は須恵器坏身である。口径が 10cm代の小型のもので、カエリをもつことから坏身としたが、(36)・(37)はカエリが平坦で坏蓋の可能性もある。身と蓋が逆転する時期のもので、遠江須恵器編年第Ⅳ期前半・板沢編年B類の7世紀初頭から前半に位置づけられる。

(42)と(43)は宝珠状のツマミをもつ坏蓋である。(42)はツマミの作りが丁重で体部に段をもつ。口径は10cm代とやや小型なタイプである。(43)はツマミが扁

平な作りとなり口径も13cm代のやや大きくなる。いずれも遠江須恵器編年第Ⅳ期後半・板沢編年E類の7世紀後半に位置づけられる。

(44)・(45)は須恵器坏身である。(44)は底部がヘラ削りで平坦、(45)は底が丸く成形している。口径が11cm代で遠江須恵器編年Ⅳ期後半・板沢編年E類の7世紀後半に位置づけられる。

(46)・(47)は須恵器高坏である。2点とも口縁部を欠損し脚部が太い無蓋高坏である。遠江須恵器編年ではⅣ期の7世紀に位置づけられる。

(48)・(49)は口縁部を欠損した須恵器ハソウである。胴部が大きく、注口部が突き出していることから、7世紀に位置づけられる。

(50)～(55)は須恵器平瓶である。(50)・(51)・(53)・(54)は胴部上半が脹らみ、古い傾向がある。(52)は胴上半部が平坦で肩が角ばり新しい様相がみられる。(55)は口縁が広くなりボッチが2個ついている。いずれも7世紀代のものである。

(56)・(57)は壺類で、(56)がフラスコ瓶・(57)は底部に高台を貼り付けた大壺で7世紀代のものである。

○奈良時代の瓦（第7図・遺物観察表2）

(58)～(60)は奈良時代の布目瓦である。(58)は丸瓦で表面は無地、裏面に布目がある。(59)・(60)は平瓦で表面はタタキ目の格子目があり、裏面は布目である。

この地域で布目瓦の出土例としては牧之原市石雲院入口付近と竹林寺廃寺がある。石雲院の出土例は、格子のタタキ目がみられない。竹林寺廃寺の瓦を教材用に持ち込んだものと考えられる。

○鎌倉時代の陶器（第7図・遺物観察表2）

(61)・(62)は鎌倉時代の山茶碗である。2点とも高台を貼りつけた小碗で体部が直線的な作りをしている。

12世紀前半に位置づけられるもので、「上沢かま跡」の墨書がみられる。隣接地の丸山古窯跡は、字名が「上沢」であることから丸山古窯跡の出土遺物と考えられる。

○江戸時代の遺物（第7図・遺物観察表2）

(63)は志戸呂焼の仏花瓶である。口縁を欠くが、ラッパ状に開き、頚部が長く直線的、胴部は三角状になる。ヘラ削りにより成形される。底部は貼りつけ高台である。

全体的に黄色の釉が施釉されるが発色していない。

○自然岩石（第7図・遺物観察表2）

(64)は中央に穴があけられた泥岩製の石である。人工的な削りはみられず、自然により空けられたものではないだろうか。岩石の芯が剥離したり、水などにより長期により空けられた可能性がある。今後は地質の専門家の意見も聞いて判断したい。

4. 遺物の出土箇所について

湯日小学校保管遺物は、遺物に墨で記入されたものが7点みられる。磨製石斧(13)・打製石斧(26)は「吹木」の文字があり、吹木原遺跡より採集された石器であろう。吹木原遺跡は、数回の確認調査が実施されているが、正式に発掘調査がされたことがない。地元の増田七平氏により採集された遺物が教育委員会に寄贈され、一部が公表されている。(澁谷昌彦・篠ケ谷路人「第6節　吹木原遺跡採集遺物　増田七平氏寄贈について」『原ノ平遺跡』島田市教育委員会 1992)これらの資料をみると、後期旧石器時代終末の細石核や縄文時代中期後半の曽利Ⅲ式土器、打製石斧や石錘など主体は中期後半である。 東鎌塚原遺跡・御小屋原Ⅰ・Ⅱ遺跡など同時期の集落が隣接しており、人口の増加に伴い分村した集落のひとつが吹木原遺跡と理解される。

須恵器類平瓶(54)は、「昭二四 10．1原ノ平開墾出土渡辺英逸氏寄贈」と墨で記されている。山村宏氏の記述によれば、原の平・大原古墳群の記述をみると、開墾時に多数の遺物が出土しており、初倉中学校や個人が保管していると言う。この平瓶はその一つが湯日小学校に寄贈されたものであろう。首が短く胴上半が脹らんでおり7世紀でも前半のものである。

(55)の平瓶は、「吹木向原産」の文字が記されている。この名称の古墳群はみられない。吹木地区の古墳群としては、南側斜面に「叶釘山古墳群」がある。

別名「又川古墳群」とも呼ばれ、発掘調査が行われた記録があり、平瓶・坏身・坏蓋・土師器坏などが教育委員会に保管されている。14基の横穴式石室が確認されており、開墾時に発見されたらしい。発見者が所有したものを小学校に寄贈されたと思われる。須恵器類をみると、7世紀後半に位置づけられる。

須恵器フラスコ瓶(56)は「鎌塚御林」の文字が記載されている。郷土史家の増田茂雄氏の資料によれ

ば、昭和 48 年2月に「鎌塚桜下」より皇宋通宝・平安時代後期の土器 11 点・鍔1点が発見された事実が記録されている。現地を確認したところ、桜の木の下に古墳に使用されたと思われる石室の残骸が集められ奉られていた。ここが「鎌塚桜下」と考えられる。包蔵地では、「本村原古墳群」に該当し、大正時代より5基の古墳が存在していたらしい。フラスコ瓶は、この古墳群の出土遺物の可能性がある。

山茶碗小碗(61)は「中溝上段かま址」、(62)は「上段かま址昭 24」の記述があり、昭和 24 年に採集されたことがわかる。上段の字名は丸山古窯跡の地名で、平成3年に農道拡幅工事にともない灰原の発掘調査が行われ、灰原・工房跡・土坑などが検出されている。平成7年には、さらに道幅が広がる計画から財団法人静岡県埋蔵文化財発掘調査研究所により登窯本体の調査がおこなわれた。碗・輪花碗・小碗を生産しており、12 世紀前半に位置づけられる。現地は山林で昭和 50 年代後半に私も現地を訪ねたことがある。斜面地の一部が崩れて破片を採取した記憶があるが、昭和 24 年頃から知られていたことがわかる。

このほか、出土地の記載はないが、縄文時代後期・晩期の土器や縄文時代の石器類については、石鏃の形態や下呂石を含むこと、石剣など祭祀遺物など後期・晩期の特徴がみられることから、小学校隣接地の風西遺跡採集遺物が含まれていることと思われる。

5. まとめにかえて

湯日小学校に保管されている遺物は、吹木原遺跡・原ノ平古墳群・叶釘山古墳群(又川古墳群)・丸山古窯跡の出土品である。古墳群出土の須恵器類は、出土古墳が記されたものばかりではないが、ほとんどのものが7世紀代である。

湯日地区の古墳としては、東京国立博物館に保管されている金銅製の馬具が発見された御小屋原3号墳が有名である。明治時代の発掘で詳細な記録は残されておらず、石室の形態や馬具以外の副葬品については不明な部分が多い。近年、御小屋原Ⅰ遺跡や東鎌塚原遺跡内で同時期の7世紀後半の横穴式石室が発掘されていることから、この地区における7世紀代の古墳について明らかになりつつある。初倉地区では、谷口原古墳群・高根森古墳群・宮裏中原古墳群など牧之原台地東側先端に分布する古墳群は6世紀後半から築造され、7世紀まで追葬されるが基数は減少する傾向にある。これに比べて、湯日地区では7世紀から古墳の築造が始まる。大井川右岸では、牧之原市仁田山ノ崎古墳や鍋坂古墳など金銅装の馬具を保有する有力者の古墳が比較的集中している。

静岡県内では、静清平野など耕作地を広くもつ経済的な豊かな地域に有力古墳が築造される傾向がある。大井川右岸では、初倉側は大井川の氾濫原が広がり耕作地は認められず、海岸線も現在より内陸に入り込んでいた。「船木」の地名が表すように、船を使った貿易をおこなった集団が輸入品である豪華な副葬品を持ち込むことができたと推察される。こうした集団のひとつが湯日の地に居住していた証となる貴重な資料である。

湯日小学校の歴代校長先生のなかに増田茂雄氏の名前がある。増田氏は湯日出身で考古学に興味があり兄弟の七平氏とともに自宅周辺の吹木原を中心に土
器や石器を採集され、一部が教育委員会に寄贈されている。増田氏が湯日小学校に勤務されている間に、地元の方より寄贈された遺物がここに残されているのかもしれない。湯日小学校は令和 3 年 3 月をもって閉校となることから、これらの資料は教育委員会博物館課の所有となる予定である。今後は近隣施設での公開などに活用し、この宝物を改めて後世に引き継ぐようにしていきたい。

【参考文献】

・清水　昭「風西遺跡」『大井川流域の文化』静岡県立島田高等学校郷土研究部　昭和 28 年
・山村　宏「初倉村に於ける古墳文化」『大井川流域の文化』静岡県立島田高等学校郷土研究部　昭和 28 年
・山村　宏「その後の風西遺跡」『大井川流域の文化』静岡県立島田高等学校郷土研究部　昭和 31 年
・篠ケ谷路人「島田市風西遺跡出土注口土器について『静岡県考古学研究 38 号』静岡県考古学会 2006
・『竹林寺廃寺』島田市教育委員会 1980
・『南原瓦窯跡』島田市教育委員会 1981
・『丸山古窯跡』島田市教育委員会 1992
・『丸山古窯跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997